

『ヴェニスの商人』覚書

後 藤 泰 一

はじめに

シェイクスピア『ヴェニスの商人』の観客あるいは読者は、第四幕第一場（ヴェニスの法廷）の場面で釘付けになる。そして、とりわけ法学者ないし法律家は、ポーシャの下す判決に強い関心を寄せる。実は、ポーシャの判決を巡り、これまで多くの法学者・法律家が熱い議論を戦わせてきている。私もあの判決に興味をもち様々考えたことがある（信州大学法科大学院法学未修者のために執筆した小冊子『法学読本——法律学基礎入門——』（非売品）に収録：「文学作品と法——『ヴェニスの商人』を素材として——」）。その後、考察の視点をもっと明確にした方がよいと思うようになり、この度、理窟と人情の調和という視点から（いうまでもないが我妻栄先生の『法律における理窟と人情』（1987年・日本評論社・加藤一郎解題））が念頭にある）、あの判決を改めて考えてみることにした。この覚書がそれである。これも私の研究教育活動の一環と考えるので本論集に掲載させて頂くことにした。

1. 『ヴェニスの商人』における裁判のあらすじ

大筋は、福田恆在訳『ヴェニスの商人』（1999年・新潮文庫）に倣ったが、中野好夫訳『ヴェニスの商人』（2011年・岩波文庫）も名訳として知られている。両者を読み比べてみるのも面白い。

《登場人物（関係者のみ）》（なお、適宜、省略させていただいた箇所があるがご了解願いたい）

ヴェニスの公爵

アントーニオー：ヴェニスの商人（貿易商）

シャイロック：ユダヤ人の金貸し（富めるユダヤ人）

バサーニオー　：アントーニオーの親友（ポーシャへの求婚者）

ポーシャ　　：ベルモントの貴婦人（バサーニオーの恋人・富める女継嗣）

グラシャーノー：アントーニオーとバサーニオーの友人

親友バサーニオーから借金を申し込まれたアントーニオーは、なんとかしてそれに応えなければと思い、ユダヤ人の金貸しシャイロックに3,000ダカットの融通を申し込んだ。利息というものに否定的な言動を繰り返すアントーニオーに対して、シャイロックは「……さしあたり御入用の金高、みごと御用立てて進ぜよう、そのおれの金にはびた一文の利子もとらぬ……」「……もし証文記載のこれこれの金額をですな、これこれの日、これこれの場所において返済できぬときには、そのかたとして、きっちり1ポンド、その、あんたの体の肉を頂戴したい。どこでもおれの好きなところを切りとっていいということにさせていただきたいもので」というと、アントーニオーは返答し、「承知した、間違いない——その証文に判をつこう、そしてユダヤ人も案外、深切だと言いそえよう」という。期日がきても返済がなかった——豪商アントーニオーの持船がことごとく難破し投資も全部水泡に帰したのであった。そこで、シャイロックは、証文どおりアントーニオーの胸の肉1ポンド（約453.6グラム）の切取りを求め法廷で争うに至ったのである（第4幕第1場——裁判官は、ポーシャが変装したものである）。

バサーニオーが証文の金額を10倍にしてでも返済するから、「今度だけは権力に訴えても法を曲げて下さいますよう」と嘆願するが、ポーシャはいう。「それは許されぬ、ヴェニスのいかなる権力も、定れる掟を動かすことはできない。それが前例として記録に残されようものなら、のちに、それを楯として次々に乱れが生じ、国を誤るもとなろう。到底出来ぬことだ。」「名判官ダニエル様の再来だ、まったくだ、ダニエル様だ！……おお、裁判官様、お年に似あわぬ御分別、シャイロック、心からお見あげ申します。」（ポーシャの衣の裾に接吻する）」とシャイロック。

ポーシャ：「ひとつ、証文をみせてもらおう。」

シャイロック：「(すばやく懷中から紙片を取り出し) これでございます。博士様、これがそれで。」

ポーシャ：「(紙片を受けとり) シャイロック、承知しているな、この3倍の金を返すと言っているのだぞ。」

シャイロック：「誓いを、誓いが、天に誓いをいたしましたので。まさか、おのれの魂に偽証の罪を犯させろとは？ なりませぬ、たとえヴェニス全部を頂戴しましても、そればかりはなりませぬ。」

ポーシャ：「(紙片に眼をとおし) たしかに証文の期限は切れている。シャイロックがこれを楯に要求していることは法的に正しい。この商人の心臓すれすれに1ポンドの肉を切りとるというわけだな……が、慈悲をかけてやれぬものか、3倍の金を受けとり、この私に証文を破らせてもらえないだろうか？」

シャイロック：「……いかなる人の舌も私の決心を変える力を持つてはおりませぬ。あくまで証文どおりをお願いいたします。」

……

ポーシャ：「仕方あるまい、法の条文に照らして……この証文に指定してあるかたは、十分に正当なものと認められる。」

……

シャイロック：「さよう、その胸だ、証文にそうある、……『心臓すれすれに』はつきりそう書いてある。」(中野・前掲『ヴェニスの商人』140頁では、「……『心臓にもっと近接し』と、ちゃんとうございますからな」と訳されている)

……

ポーシャ：「シャイロック、外科医を呼んでおけ、お前の費用でな、傷口の手当をしないと、出血のため死ぬかもしれぬ。」

シャイロック：「そのことは証文に書いてございますかな？」(紙片を取り、調べる)

ポーシャ：「そうは書いていない。それなら、どうだというのだ？ そのくら

いの情は当たり前のことと思う。」

シャイロック：「ございませんな、証文にはない。」（紙片をポーシャに返す）

……

ポーシャ：「この商人の肉 1 ポンドはお前のものである、当法廷はそれを許す。国法がそれを与えるのだ。」

……

シャイロック：「博学このうえなき裁判官様——判決が下ったのだ——さあ、用意をしろ。」（ナイフを逆手にアントーニオーに近づく）

ポーシャ：「待て、まだあとがある。この証文によれば、血は一滴も許されていないな——文面にははっきり『1 ポンドの肉』とある。よろしい、証文のとおりにするがよい、憎い男の肉を切り取るがよい。ただし、そのさい、クリスト教徒の血を一滴でも流したなら、お前の土地も財産も、ヴェニスの法律にしたがい、国庫に没収する。」

グラシャーノー：「おお、正義の権化、まったく立派な裁判官様だ！——おい、聞いたか、ユダヤ人——おお、博学このうえなき裁判官様！」

シャイロック：「それが法律でございますか？」

ポーシャ：「（本を開いて）自分でこの条文を見るがよい。ひとえに正義を求めたのはお前だ、よいか、それゆえに、ここに、お前の欲する以上の正義を取らせようというのだ。」

グラシャーノー：「おお、博学多識の裁判官様！——聞いたか、ユダヤ人——博学多識の裁判官様！」

シャイロック：「それなら相手の申出に応じましょう——証文の 3 倍はらえば、このクリスト教徒を助けてやる。」

バサーニオー：「さあ、これが金だ。」

ポーシャ：「待て！ このユダヤ人に必要なのはただ正義だけだ——待て、急ぐには及ばぬ——この男には証文のかた以外なにもやってはならぬ。」

グラシャーノー：「おい、ユダヤ人！ 正義の権化、博学多識の裁判官様だ！」

ポーシャ：「さあ肉を切るがよい。血を流してはならぬぞ、また、多少を問わず目方の狂いは許さぬ、きっかり1ポンドだ。たとえわずかでも、それが重すぎたり軽すぎたりしたばあい、1分の差にもせよ、あるいは1分の20分の1の差であっても、いや、髪の毛1本の違いで秤が傾いても、そのときは、命は無きもの、財産は没収と覚悟するがよい。」

グラシャーノー：「第二のダニエル様だ、名判官ダニエル様の再来だ、なあ、ユダヤ人！ おい、不信心者、見ろ、風向きが変わったぞ。」

ポーシャ：「どうしたのだ、シャイロック、なにを考えている？ 早くお前のかたをとるがよい。」

シャイロック：「元だけ返していただき、ここは引き退ることにいたしますよう。」

バサーニオー：「用意は出来ている、さあ、これだ。」

ポーシャ：「この男は公然とこの法廷でそれを拒絶したのだ。ただ正義を与え、証文に物を言わせるがよい。」

グラシャーノー：「名判官ダニエル様、言ったとおりだ、第二のダニエル様！ お礼を言うぜ、ユダヤ人、いい言葉を教えてくれたな。」

シャイロック：「元だけでも取つてはならぬとおっしゃるのですか？」

ポーシャ：「かた以外、なにもやるわけにはゆかぬ、それも命がけだぞ、シャイロック。」

シャイロック：「畜生、勝手にしろ！ こんな愚にもつかぬ問答、いつまで相手になっていられるものかい。」（出て行こうとする）

ポーシャ：「待て、シャイロック。当法廷はまだお前に用がある……（本を読んで聴かせる）ヴェニス法律により、かく規定する。ヴェニス市民に非ざる者にして、市民の生命に危害を加えんともくろみしこと明白になりたる場合は、その企図の直接なると間接なるとを問わず、危害を加えられんとしたる側において、相手の財産の一半を取得し、他の一半は国庫の臨時収入として没収する。かつ罪人の生死は公爵の裁量に委ねらるべきものとし、何人もこれに容喙することを得ず……（本を閉じる）現在のお前の立場がこれに

該当する。なぜなら、お前の行為が明白にそれを示しているからだ、すなわち、お前は間接に、いや、直接にも、被告の生命に危害を加えようともくろみ、ただいま読んで聴かせたごとき罪科をわれとわが身に招いたのである……坐れ、よいか、あとは公爵の慈悲を頼むほかない。」【上記「ヴェニス市民に非ざる者にして……側において」の個所につき、中野・前掲『ヴェニスの商人』146頁の訳によれば、「もし、外国人の身をもって、ヴェニス市民に対し、直接手段たると、間接手段たるとを問わず、生命を脅かした犯罪事実が明白になった節は、犯人が……」となっている。】

グラシャノー：「お頼みしてみろ、首をくくることが許してくださるようにな。とはいうものの、財産は国家に没収ときたのでは、縄一本買う金もなし、ここではどうしても官費でしめてもらうよりしょうがないぜ。」

公爵：「シャイロック、お前たちとの心の違いを見せてやろう、命は助けてやる、頼まれずともな。財産の一半は、たしかにアントーニオーの所有とする——他の一半は国庫に入れるが、あるいは格別の情を持って罰金に減刑してやらぬでもない。」

ポーシャ：「さよう、国庫の分についてはな、アントーニオーの分は別だぞ。」

シャイロック：「いいや、命でも何でも取るがいい、お情けは要りませぬ。家を取りあげられるのも同じことだ、家を支える親柱を取り上げるというのだから。命を取りあげるのも同じことでございます、命をつなぐ財産を取り上げるとおっしゃるのだから。」

ポーシャ：「アントーニオー、お前にも何か慈悲の用意があるか？」

アントーニオー：「公爵、および御一同にお願いいたします。この男の財産の一半にたいする罰金も、免じてやって下されば何よりとぞんじます。他の半分は私がしばらくお預かりしておいて、老人の死後、ある男に、と申しますのは、さきごろ老人から娘を奪った男の手に譲りたいと考えております……なお条件が二つあります。こうして許してやる代りに、老人はただちにクリスト教徒に改宗すること、それから、今、この法廷で、財産譲渡の証書

を書くこと、すなわち、死後の財産はすべて婿のロレンゾーと娘の所有に帰すべしと一札いれることであります。」

公爵：「そうさせよう、それがいやだと言うなら、この特赦も即刻、取消しにする。」

ポーシャ：「それでよいか、シャイロック？ 何か言うことはあるか？」

シャイロック：「それでよろしゅうございます。」【中野・前掲『ヴェニスの商人』149頁では、ポーシャ：「ジュウ、異議はあるまいな？ どうだ？」、シャイロック：「ございません。」と訳されている。】

……

シャイロック：「これで帰らせていただきとうぞんじます。気分がすぐれませぬので。証書のほうは送ってくだされば、いつでも署名いたします。」【中野・前掲『ヴェニスの商人』149頁では、「どうか、手前はこれで引き取らせていただきます。気分が勝れませんので、証書はあとから送っていただければ、署名はきつと致します。」と訳されている。】

……

2. 『ヴェニスの商人』の背景

- (1) エリザベスとイギリス・ルネサンス シェイクスピアが『ヴェニスの商人』を書いたのは、大体1596年～1597年頃と推定しうのではないかとされている（福田・前掲『ヴェニスの商人』141頁の解説参照。なお、中野好夫氏は、1596年の秋というのがもっとも穏健な説であろうとされる——中野・前掲『ヴェニスの商人』194頁の解説参照）。その頃のイギリスは、女王エリザベス1世が絶対主義の象徴として君臨し、ドレイク船長（1543年頃～1596年。俗に海賊船長と呼ばれ、エリザベス1世から私掠船の許可を得て方々で戦利品を獲得していた）の世界一周、スペインの無敵艦隊の撃破（1588年。この時の英国の副司令官がドレイクである）、東インド会社の設立（1600年）など華々しい外交的政策・戦略がとられていた時代である。しかし、無敵艦隊撃破以降は、深刻な財政悪化、凶作・飢餓、

インフレの進行、疫病の流行、各地での食糧暴動など経済的・社会的な危機的状况に見まわれた時期でもあった。それにもかかわらず、エリザベスの時代が「華やかな繁栄の時代というイメージをもってきた背景には、無敵艦隊の撃退という劇的な事件のほかに、シェイクスピアをはじめとするルネサンス文化の輝きのなかに、時代の暗部が霞んでしまったことがあげられ」、(『リヤ王』『オセロー』『ハムレット』『マクベス』の四大悲劇のほか様々な喜劇・史劇などを通して)シェイクスピアの「豊饒な創作世界は、われわれに社会の暗さを忘れさせるに十分な輝きをもっている」とされている(川北稔編『イギリス史』第4章「近代国家の成立」(指昭博)世界各国史11(2011年・山川出版社)165頁～174頁を参照)。なお、科学的研究方法としての帰納法を提唱した哲学者ベーコン(1561年～1626年)もこの時期に活躍している。

- (2) 商業都市ヴェニスとユダヤ人 ヴェニスは、すでに13世紀以降イスラム勢力に対抗すべく十字軍を援助する代償として貿易特権を獲得するなどヨーロッパにおける地中海貿易を支配してきが(16世紀末から17世紀にかけての地中海及び東方貿易については、永井三明『ヴェネツィアの歴史共和国の残照』(2006年・刀水書房)44頁以下を参照)、そのような経済活動の活発な都市では、金貸業は否応なしに大きな存在となっていた。その頃のユダヤ人は、国外追放にあってたり社会的に人種的差別を受けたりしながらも、経済的には各地で金貸業として繁栄し富を蓄えていた。イギリスでは、1290年エドワード1世が一切のユダヤ人を国外追放し、「その後彼らがイギリスに自由居住を許されたのは1650年クロムウェルの治下においてであった。したがって、シェイクスピア時代には少なくとも表面上イギリス国内にユダヤ人は1人もいなかったことになる(但し、実際には少数ながらロンドンにもいた証拠がある。)したがって、この国禁という事実がユダヤ人に対する一般イギリス国民の反感を強くしていたろうことは容易に考えられる。」とされている(中野・前掲『ヴェニスの商人』205頁の解説参照)。

一方、この劇の舞台となっている商業都市ヴェニス（ヴェネツィア）では、15世紀末頃にイペリア半島から大量に流入したユダヤ人と一般市民との間で様々な摩擦が生じたことから、ヴェネツィア共和国は、1516年に法令によってすべてのユダヤ人を町西北部の特定の場所（ゲットー）に住まわせることにしたのであるが、その土地はもともと湿地であり、その隣にあった銅の鑄造工場から出る廃棄物を捨てる場所だったようである。この工場が他所に移転したことに伴い、「干拓によって宅地化が進み、その後、ユダヤ人の居住区となったのである。『鑄造する』という言葉の *gettare* にちなんで、この一画はもともと *Getto* と呼ばれ、そこから *Ghetto*（ゲットー）の言葉が生まれ、やがてユダヤ人居住区を意味する言葉として世界中に広まった」ということである（陣内秀信『イタリア海洋都市の精神』興亡の世界史08（2008年・講談社）136頁～138頁を参照）。「ゲットーの誕生は、もともとここに住宅を所有しているキリスト教徒にとっては高額の家賃が保証されるし、ユダヤ人にとっては安全が保障されるという利点があり、双方から歓迎された。……大きな広場のまわりに店を構え、利子をつけて金を貸すユダヤ人の銀行は、人々の暮らしにとって重要だったのである。……ヴェネツィアは、ユダヤ人にとっては、比較的居心地のよい土地だけに、流入する人々が増え、新たな地区を拡張した。多くの店舗、学校、老人ホームや病院などの社会施設がどんどんつくられた。ユダヤ人といっても、出身地により異なるグループを形成し、ドイツ系、スペイン系、イタリア系をはじめ、五つのシナゴグ（集会所）ができた。……相互の衝突を避けるため、共和国はユダヤ人の居住地域を巧く分けていたのである。したがって、実に多様な施設が出来た。貧しく高密度な居住環境でありながら、ゲットーほど豊かな施設が整った場所は、ヴェネツィアの他の地区には見当たらない。」とされる（陣内・前掲『イタリア海洋都市の精神』138頁～140頁を参照）。

- (3) 中世キリスト教社会と金貸業 中世のキリスト教会は、金利を罪惡として禁じていたのであるが、その倫理的根拠は、「むしろアリストテレス

にあるので、その『政治学』の中で彼は金利を非難してもっとも憎むべき行為であるとなし、理由は『まるで金に繁殖能力があるかのように、金に金を生ませることはもっとも不自然だ』というのである。この考え方はシェイクスピア時代にまで継承され……当時の文書に見える金利反対の根拠は、つねに『自然に反する』『不自然な繁殖行為』であるという点にあった」とされる（中野・前掲『ヴェニスの商人』207頁の解説を参照。上記のアントーニオとシャイロックの利息に関するやり取り中で、「たしか、利のついた金の貸し借りはしないと云われたようだが」とシャイロックがいうと、アントーニオは「おれの流儀にはないことだ」とさりと返しているが、このあたりに当時の世相を垣間見ることができる）。

しかしながら、16世紀という時代は、近世資本主義の目覚ましい台頭が始まった変革期であり、「資金の活発な動きは、もはや金利即罪悪という道徳に安じていることを許さなくなり」、「キリスト教でもカルヴィンが逸早く金利の合理性を承認し」、「イギリスでもフランシス・ベーコンその他の先覚者はすでに金利の大きな効用を認めて、『金利の廃止を論ずるが如きは無意味である』（『金利に就いて』参照）とまで主張して、むしろその合理妥当な活用についてこそ考えていた。したがって、イギリスもついに1571年（この喜劇の書かれる20余年前）には、最高1割を限度として国家的に金利を承認した」とされるのである（中野・前掲『ヴェニスの商人』207頁～208頁の解説を参照）。

そのような社会的客観的経済活動の変化にもかかわらず、「一般民衆の頭には未だ牢乎として中世的金利観が根を張っていた。イギリスのような新教徒国家でもそうであった。それにまたエリザベス朝から17世紀初頭というのは、ある意味で金貸しの黄金時代とさえいわれた時代で、つまり、中世的な社会制約は破壊され、しかも他方完備した近代の銀行制度はまだ確立を見ていない、ちょうどその中間の乱脈時代だったのである。1割の公定利率などは一部商人同志の間だけのことで、社会的変動期に際し、いろいろな理由で金に窮した紳士、小商人、農民たちは、この上ない金貸業

者たちの餌食」となったようであり、『ヴェニスの商人』という喜劇は、シェイクスピアが「まったく当時の看客の要求と劇場のメカニズムとを巧みに計量に入れて書いた作品であった」とされる（中野・前掲『ヴェニスの商人』208頁～209頁の解説を参照）。

商業都市では、聖職者さえも金貸業者から借金をするなど、まさに金貸しは日常的に行われていたようであり、『ヴェニスの商人』における法廷の場面も以上のような時代的・社会的背景を認識しておく必要がある。

ちなみに、福田・前掲『ヴェニスの商人』152頁～153頁（福田氏による解題）は、つぎのように解説する。「クイラ＝クーチの言葉をそのまま借りれば、シェイクスピア当時の英国はユダヤ人をひどく排斥した時代であって、彼自身おそらくユダヤ人をろくに見たことがないのではないかというのである。また、そういう時代であったから、エリザベス朝時代の人々は、貴族と一般市民との別なく、ユダヤ人を蔑み憎み、人でなしの扱いをしていて、少しも省みることがなかったのである。敵を愛することを信条としたクリスト教徒ではあったが、教祖を十字架にかけた敵だけは例外だった。しかも、その敵のユダヤ人は昔から金貸業として栄えていた。金を貸して利を得ることは、クリスト教の道徳からはもちろん、さらに溯って古代ギリシャの道徳観からも、自然にたいする罪として卑しむべき行為と考えられていた。しかし、いかに金利を悪と考えても、金を借りねばならぬ事態は起ったし、金を借りれば当然金利の問題が生じてくる。ことに、15・6世紀の英国は広く海外に羊毛貿易を行っており、事実上、手形取引や債権債務の制度なしにはすまされなかったのである。そこでクリスト教徒は良心を傷つけずに事を運ぶため、自分の罪を背負ってもらう生けにえを必要とした。その生けにえの役をユダヤ人がみずから買って出た。中世を支配したクリスト教徒から追いつめられた彼等は、専らその間隙を縫い、金貸業をもって実利を占めて行ったのである。この金利にたいする道徳的嫌悪感は、ユダヤ人にたいする憎悪感と同様、現代人の到底理解しえぬところであろう。が、事実是这样だった。シェイクスピアはそういう一般市

民の感情を利用している。もちろん彼もその市民の一人として同様の感情に支配されていたことではあろうが、とにかく安心してシャイロックを憎まれ役に描いたことは確かである。」

- (4) シャイロックの人物像 福田・前掲『ヴェニスの商人』167頁～170頁（中村保男氏による解説）は、つぎのように述べる。シャイロックが、「畜生、勝手にしろ……」といって退散しようとしたとき、ポーシャが呼びもどす「待て、シャイロック」という「一句は万鈞の重みをもつ重要なせりふである。この一句をきっかけとして、さっきまで攻勢に出ていたシャイロックが今度は完全に裁かれる者、追われる者となるのだ。……しかし、ここでシャイロックが死刑になってしまったのでは、万事まるくハッピー・エンドに収まる喜劇ではなくなってしまう。それに、この法廷場面の主題は、法を楯にとる冷酷無常と、時には法をさえ曲げる慈悲との対決であり、後者の勝利なのである。」（同書167頁）。「シャイロックは、なによりもまず、喜劇中の悪役という役割をふりあてられた人物なのであり、他の登場人物たちは（それに観客も）そのように彼を扱っているのである。彼はみずから設けた冷酷の罠にみずからはまりこむ滑稽な鼻つまみ者なのだ。この芝居が書かれた当時の英国では、ユダヤ人は入国を禁止されており、悪どい高利貸しも道徳的に忌避されていた。その風潮をシェイクスピアは利用したまでなのである。だが、それでも、シャイロックが劇中で最も重要な役であることは否めない。彼の役は、なみの道化役者の手に負えるものではなく、すでに初演当時から、主役級の名優によって演じられてきたことから、このことが窺われる。彼は喜劇の悪役としては大型の『支配的な』人物なのである。……第3幕第1場でサレアリオーたちにむかって叩きつける皮肉な毒舌は、辛辣で生気に溢れ、彼の真情を吐露した巧みなしつぺがえしである。ユダヤ人を目の敵にするキリスト教徒を非難して彼は言う――

『あの男、おれに恥をかかせた、（中略）おれの仲間を蔑み、おれの商売の裏をかく（中略）それもなんのためだ？ ユダヤ人だからさ……ユ

ダヤ人は目なしだとでも言うのですかい？（中略）同じものを食ってはいないと言うのかね、（中略）何もかもクリスト教徒とは違うとでも言うのかな？（中略）ひどいめに会わされても、仕かえしはするな、そうおっしゃるんですかい？（中略）クリスト教徒がユダヤ人にひどいめに会わされたら、御自慢の温情はなんと言いますかな？ 仕かえしとくる。それなら、ユダヤ人がクリスト教徒にひどいめに会わされたら、われわれ持ちまへの忍従は、あんたがたのお手本から何を学んだらいいのかな？ やっぱり、仕かえしだ。（後略）』

シェイクスピアがユダヤ人を擁護しているという暴論がとびだしてくるのも、むべなるかなと思われるほど強い語調、巧みな修辞である。このせりふを拡大解釈することは許されないが、他の人物たちから見れば滑稽で冷酷でしかないシャイロックも、その喜劇的な悪役という枠内で、時と場に応じて強く自己主張をする演戯の自由と権利を認められているのである。喜劇の悪役にもこのような行動の『深み』を付与したシェイクスピアは、なんと大きな器量をもった劇作家であったことか。彼はおそらくユダヤ人の実物にお目にかかったことは一度もなかったのだろうが、それでも、このようなユダヤ人の一典型を見事に生かききっているのである。」（同書169頁～170頁）。

3. この判決に対する法学者の見方

ポーシャの下した判決をめぐり反対説（判決を批判しこれに反対する説）および賛成説（判決に賛成しこれを支持する説）があるが、これにとどまらずさらに中間説も唱えられている。これらのやりとりを通して、法ないし判決というものに対する各論者の考え方の相違などが分かってきて実に面白い。以下の論争に関しては、主に、勝本正晃『文芸と法律』（1948年・国立書院刊行）の中の「第二話 文藝に現われた法律諸相」及び村上淳一『権利のための闘争を読む』（1988年・岩波書店）を参考にしている（なお、小室金之助『法律家のみたシェイクスピア』（2001年・三修社）所収『ヴェニスの商

人』(102頁以下)は様々な法律家の主張を紹介しており参考になる。また、長尾龍一『法哲学入門』(2007年・講談社学術文庫)223頁～225頁は、パサーニオーに対するアントーニオーの同性愛者としての悲哀が『ヴェニスの商人』の重要なモチーフになっていると指摘する——探究心をそそる指摘ではあるが、あいにく本稿における考察の対象とはなっていない。さらに、長尾龍一『文学の中の法』(2006年・慈学社出版)58頁以下は、コーンスタイン(米国の弁護士)『法律家皆殺し? ——シェークスピアの法的魅力』(Daniel J.Kornstein, *Kill All the Lawyers? Shakespeare's Legal Appeal*, Princeton University Press, 1994)という本を紹介している——ポーシャの判決は正当な解釈ではなく公序良俗(public policy)違反により無効とすべきであり、民事裁判なのにシャイロックの財産没収やキリスト教への改宗まで命ずるがごときは「裁判官の歴然たる越権」ということのようなのである。)

(1) 反対説(判決を批判する説)

イエーリングは、『権利のための闘争』(Der Kampf ums Recht, 1872, 村上淳一訳(2000年・岩波文庫))の中で次のように触れている。「私は、裁判官がシャイロックの証文を有効と認めるべきであった、などと主張しているのではない。私の言いたいのは、裁判官が証文の有効性を一旦認めた以上、あとから、判決の執行にさいして、汚い策略によってこれを反故にすることは許されない、ということである。裁判官は証文を有効と認めることも無効と認めることもできたが、第一の途を選んだのである。……ヴェニスにおいてこの証文の有効性を疑う者はいなかった。アントーニオの友人たちも、アントーニオ自身も、総督も、裁判所も、すべてがこのユダヤ人を合法的な権利の持ち主と認めていた。シャイロックは、誰もが認める自分の権利を確かなものと信じ切って裁判所に助けを求めたのであり、「賢明なダニエル様」〔ポーシア〕は、復讐を渴望するこの債権者の権利を放棄させようと試みて失敗した後に——この権利を認めたのである。……勝訴者が……信じ切って判決が認めた権利を実行しようとしたその瞬間、……裁判官が、まじめに反論するまでもないほどお粗末な策略と言うしかない異議を持ち出して、その

権利を反故にしてしまったのである。およそ血のない肉などというものが考えられるだろうか。アントーニオの身体から1ポンドの肉を切り取る権利をシャイロックに認めた裁判官は、そのことによって、肉につきものの血をもシャイロックに与えたのである。そして、1ポンドを切り取る権利をもつ者は、欲するならば1ポンドより少ない量を切り取るにとどめることもできるはずである。しかし、そのいずれもが、このユダヤ人には許されなかった。かれは、血を取らずに肉だけを、多すぎも少なすぎもせぬ1ポンドかっきりだけ、切り取るように命じられた。このユダヤ人は権利を騙し取られた、といったのは私の言いすぎだったろうか？ むろんこれは、人道のためになされたことである。しかし、人道のためであれば不法は不法でなくなるものであろうか？ かりに神聖な目的が手段を正当化するとしても、なぜそのことを判決の中で行わず、判決を下したあとで行ったのであろうか？」と（同書17頁～18頁——この部分は自説に対する後述コーラーの批判に対する極めて厳しい口調の再批判であり、わざわざ1891年の「序文」の中に収められている）。「闘争において汝のレヒト（Recht：権利＝法）を見出せ」をモットーとするまことにイエーリングらしい主張である。【上記Der Kampf ums Rechtの書き出しは、あの有名な「権利＝法の目標（目的）は平和であり、そのための手段は闘争である」„Das Ziel des Rechts ist der Friede, das Mittel dazu ist der Kampf.“で始まる——たまたま手元にあった以下の小冊子から引用した：RUDOLF VON JHERING, Der Kampf ums Recht. DEUTSCHES RECHTSDENKEN Herausgegeben von Erik Wolf, Heft 10 Fünfte Auflage 1977, VITTORIO KLOSTERMANN・FRANKFURT AM MAIN, S.5. なお、この小冊子には上記の再批判を含む「序文」は収録されていない。次の文章も実にいい。正義の女神テミスが目の前に浮かんでくる。「権利＝法は、単なる思想ではなく、生き生きした力なのである。だからこそ、片手に権利＝法を量るための秤をもつ正義の女神は、もう一方の手で権利＝法を貫くための剣を握っているのだ。秤を伴わない剣は裸の実力を、剣を伴わない秤は権利＝法の無力を意味する。二つの要素は表裏一体を

なすべきものであり、正義の女神が剣をとる力と、秤を操る技とのバランスが取れている場合にのみ、完全な権利＝法状態が実現されることになる」（イェーリング・前掲『権利のための闘争』29頁～30頁。ちなみに、原文は以下の通りである（上記小冊子5頁より引用）：„Das Recht ist nicht bloßer Gedanke, sondern lebendige Kraft. Darum führt die Gerechtigkeit, die in der einen Hand die Waagschale hält, mit welcher sie das Recht abwägt, in der andern das Schwert, mit dem sie es behauptet. Das Schwert ohne die Waage ist die nackte Gewalt, die Waage ohne das Schwert die Ohnmacht des Rechts. Beide gehören zusammen, und ein vollkommener Rechtszustand herrscht nur da, wo die Kraft, mit welcher die Gerechtigkeit das Schwert führt, der Geschicklichkeit gleichkommt, mit der sie die Waage handhabt.“】

「法廷に判断を迫っているのは、もはや1ポンドの肉を要求するこのユダヤ人ではなく、ヴェニスの法律そのものである。けだし、かれの権利とヴェニスの法は一体であって、かれの権利が破滅すればヴェニスの法も破滅するのだから。……かれの運命がきわめて悲劇的である所以は、かれの権利が認められなかったことに存するのではなく、かれ、つまり、中世の一ユダヤ人が——あたかもキリスト教徒であるかのように、と言ってもよいほど——権利＝法を信じていたということに存する。……決定的瞬間までは裁判官自身がその加勢をしたのだ。ところが晴天の霹靂のように突如として破滅の運命がかれを襲い、かれを正気に返らせる。今やかれは、自分は中世社会の徐け者たるユダヤ人にすぎないということ、人びとは自分の権利を騙し取るというやり方でしか自分の権利を認めてくれないことを覚るのである。」（イェーリング・前掲『権利のための闘争』94頁～96頁）

「法律家がこの筋書きを批判するとしたら当然こう言うことになるであろう。すなわち、この証文は良俗に反するものであるから、それ自体無効である。この理由によって、裁判官は、証文をはじめから斥けるべきであった。しかし裁判官が……この証文を有効と認めた以上、……切断につきものの流

血を禁ずるのは、みっともない肩透かし、くだらない三百代言的手管と云うしかない。そんなやり方が許されるとすれば、裁判官は同様にして、地役権者に通行権を認めながら、地上に足跡を残すことを——地役権設定契約に明記されていないという理由で——禁止することもできるであろう。」(イエーリング・前掲『権利のための闘争』96頁——コーラーによってこれに加えられた「攻撃」に対するイエーリングの再批判が上記したように「序文」に載せられている)。要するに、アントーニオの命をどのような理屈によって救うかという、イエーリングは、端的にこのような契約は良俗に反するから無効だといえよというのである。

ちなみに、わが日本民法90条は、「公の秩序又は善良の風俗に反する事項を目的とする法律行為は、無効とする。」と定める。例えば、「人肉(ないし身体の一部)をかたにとつてはならない」というような個別的な強行規定があればそれを適用して解決することができるが、そういう規定がない場合には、公序良俗に反するから無効だという一般条項を適用して妥当性のある結論を導くのである。いいかえれば、そういう取引は社会秩序・国家秩序に照らして認められない、そのような契約が守られなかったからといって裁判に訴えても国家としてはそういうことにいっさい手を貸さないというわけである。

(2) 賛成説(判決を支持する説)

以上のようなイエーリングの説は近代法では通用するがシェイクスピアが『ヴェニスの商人』を書いた16世紀の末期においては通用しない理屈だといって「攻撃」したのが、上で触れたドイツの法学者コーラー(Kohler 1849年～1919年)である(ちなみに、元来、イエーリングはコーラーの先輩であってコーラーがまだマンハイムの裁判官をしていた頃、イエーリングはコーラーの著述を読んでこれをゲッチェンゲン大学に推薦したこともある程のなかだったが、イエーリングがシャイロックを権利のための闘争者としてその立場に同情したことを以て、この劇に関し何ら理解なきものとして、イエーリングの説をひどく攻撃したことにイエーリングは非常に憤慨し両者の間

にかなり激しい論争が起こったという——勝本・前掲『文芸と法律』263頁（コーラーの著書に直接触れることができなかったので勝本先生の同書のほか、村上・前掲『権利のための闘争を読む』などを参考にしたことをお断りしておきたい）。

コーラーは、中世という「あの時代においては、『契約は厳守せざるべからず』ということが不動の法律規範として社会に認められていた。世人は約束したとほり履行せねばならぬと云ふことを杓子定規に考へて、それで法律生活の安定が保てると考へてゐた（日本でも昔は同様であつた）。然し、あの場合、契約に拘泥すれば其結果が却って正しくない」と云ふことは、当時の裁判官にも感じられてゐたのである。そうとすれば、あの判決は、まことに已むを得ない。多少は無理があつても、少なくとも結果に於いては正しい。あれはあれでよい判決である。たゞ判決理由が悪いのに過ぎない。然し、かかる判決は、よい判決理由を具備する悪い判決よりも常に優れてゐる。先づよい判決をなせ。よい理由は総て之に従ふであらうと（Kohler. Shakespeare, S.43）。」（勝本・前掲『文芸と法律』262頁～263頁。村上・前掲『権利のための闘争を読む』9頁は、「コーラーによりますと、法律の内容が人びとの法意識、正義感と合わなくなっている場合、近代の裁判官は、その法律、ないし法律によって認められている権利を、良俗違反として無視することができる。しかし、シェイクスピアの時代の裁判官は、まだそれほど強い力をもっていなかった。裁判官は、せいぜい、詭弁的な理由づけによって、人びとの正義感に合わない法律の適用を避けることができたにすぎない」と説明する。）

こうしたコーラーの指摘にはもっともなところがあるとして、村上淳一先生は次のように述べられる。「法の発展が、まず擬制（フィクション）によって、場合によってはこじつけによって開始される、というのはよくあることです。そればかりではなく、シェイクスピアの時代、当事者は現在以上に民事訴訟の主役であり、ようやく刑事裁判において裁判官のイニシアティブが発揮されはじめたところですから、民事ではこじつけによってシャイロッ

クの権利実行の途を閉ざしたポーシアが、ヴェニス市民の生命を脅かした罪によりシャイロックに刑罰を課することもできると説示する個所などは、いかにもありそうな話です。したがって、シェイクスピアおよびコーラーに対するイエーリングの批判は、歴史的な背景を無視しているという弱味をもっていると言えるでしょう。」(村上・前掲『権利のための闘争を読む』9頁)。

しかしながら、コーラーのように「あの判決は、まことに已むを得ない」(上述) といつて割り切ってしまうことに、私は疑問を感じるのである。「多少は無理があつても、少なくとも結果に於いては正しい。あれはあれでよい判決である。たゞ判決理由が悪いのに過ぎない……かかる判決は、よい判決理由を具備する悪い判決よりも常に優れてゐる」(上述) といわれると、なるほどなと説得されてしまいそうになるが、ここは踏ん張って考えなければならない。私なりに抵抗を試みるならば次のようになる。すなわち、そのような判決(結論・主文)と理由の優劣によって片付けられる次元の問題ではないのではないか——揚げ足をとるようで恐縮だが、理由・理屈に心底納得できるのであれば結果は問わないという人生観・価値観もありうるし、極端なことをいえば、己の信ずる考えに従い命さえ惜しまないと考える人さえいる——裁判の判決は、理由と結論がきっちり噛み合つてあつて(調和して)こそ、国民の信頼を得ることができるのであつて、判決が名判決といわれる所以もそこにある、判決理由の中から法格言や法理が生まれてくることも少なくないではないか、と。

ただ、村上淳先生の「シェイクスピアおよびコーラーに対するイエーリングの批判は、歴史的な背景を無視しているという弱味をもっている」(上述) との指摘は、一つのヒントを与えてくれる。「歴史的な背景」を足がかりに、私は、むしろ「中世の商業都市ヴェニスを舞台にした『ヴェニスの商人』の法廷劇」という「背景を無視して」はならないのではないかと考える。つまり、ポーシアの判決の妥当性を判断しうるのは、まさしく、あの法廷(法廷劇)で適用された法律に拠るしかないのではないか(ほかにも「戯曲の中でわれわれに示されたヴェニスの法律」(小室・前掲『法律家のみたシ

エイクスピア』121頁参照)においても同様の指摘が見られる)ということである——これが私の基本的姿勢である(この点は以下でも触れる)。そう考えると、ヴェニスの法廷劇で示された法律(それを推測すること=法の発見)のみならず、その背後にある当時の(劇で描かれた)ヴェニス市民の法感情などを無視してはならないということになる。

(3) 中間説ならびに私見

イエーリングの説、すなわち、公序良俗違反だから無効であるといった主張は、(コーラーがいうように)今日行われる裁判としては妥当するであろうが、あの時代においては無理がある——公序良俗に反する行為は無効だとする考え方は、19世紀以降の近代法に始まるからである。そうかといって、コーラーが賛成するポーシャの判決にも——イエーリングが批判するように——無理がある。さらに、勝本先生も次のように批判される。すなわち、あのような「判決理由が成り立つとすれば、この判決が実生活に及ぼす影響は誠に恐るべきものがある。総て肉類を売買する場合には、斤量につき一々物理的正確さを期しなければならず、或いは又、特に多少の血液及び脂肪を含有すべきことにつき特約をせねばならぬ。乗物に乗るときは、自体のみならず帽子や靴迄も同乗することにつき、一々合意を必要とすることになる。少なくとも当事者は、かゝることを楯にとって何時でも自由に問題を惹起せしめ得るものと云はねばならぬ。」と(勝本・前掲『文芸と法律』265頁)。

上記のように理解した上で、当時の法観念ないし契約観にも合致し、また、アントーニオーの命も救えるようなうまい判決はないものだろうか。順を追って考えてみよう。

(ア) まず、あの契約=証文は当時において有効とされたのであろうか。上記のように、証文の金額を10倍にしてでも返すから「今度だけは権力に訴えてでも法を曲げて下さいますよう」とのバサーニオーの嘆願に対して、ポーシャは、「それは許されぬ、ヴェニスのいかなる権力も、定まれる掟を動かすことはできない」といつているあたりからすると、あの契約はどうも有効と観念されていたのではないか。この点、上記のように、イエーリ

ングも肯定的に言及し、「ヴェニスにおいてこの証文の有効性を疑う者はいなかった。アントーニオの友人たちも、アントーニオ自身も、総督も、裁判所も、すべてがこのユダヤ人を合法的な権利の持主と認めていた。シャイロックは、誰もが認める自分の権利を確かなものと信じ切って裁判所に助けを求めたのであり、「賢明なダニエル様」〔ポーシア〕は、復讐を渴望するこの債権者の権利を放棄させようと試みて失敗した後に——この権利を認めたのである」と述べて（イェーリング・前掲『権利のための闘争』17頁）、注をつけわざわざ以下の場面をあげている（以下は、上記『権利のための闘争』村上淳一訳に拠る——なお同書では、公爵を総督と訳している）。

「第3幕3場 アントーニオ『総督だとして法の活動を妨げることはできぬ。なぜなら……』。第4幕1場 総督『君には気の毒なことになった』。アントーニオ『いかなる法律的手段によってもかれの憎悪を逃れることはできませんから』。ポーシア『ヴェニスの法律はその方〔シャイロック〕を難ざることができない。……それは許されない。ヴェニスのいかなる権威といえども有効な法律を変えることはできない。……法律の内容と指示するところは、この証文によって義務づけられている賠償を全く正当なものとして認めている。……この商人の肉1ポンドはその方のものだ。裁判所がこれを認め、法がこれを与える』。したがって、証文を完全に有効と認める法規すなわち一般的法命題が一同により疑問の余地のないものとして承認されている……（以下略）……」（イェーリング・前掲『権利のための闘争』18頁～19頁）

法の歴史の観点から、債務の不履行があった場合にその債務者の肉を切り取るという旨の契約というのは、債務者の責任というものが人的責任から物的責任（最終的には損害賠償責任は金銭で解決されることになる——もめごととは最終的に金銭でけりをつける）への過渡期を示しているとの指摘がある。すなわち、ローマの法律には、債務不履行があったときには債務者の身体を分割（裁断）すべし、分割に多少の差ありとも罪にはならず

という旨の規定が置かれていた（十二表法第6条：紀元前450年頃に制定された法典）。また、ノルウェーでも昔、債務不履行があったときには、債権者は債務者を捕らえ、その両手両足を評価し債務額に応じてこれを切り取るという過酷な制度があったとされている。その後、法文化の進展により、民事・刑事の責任が分化し、近代法のもとで人権尊重の思想が芽生えてくると債務者の保護が重視され、やがて肉体的制裁から自由の制限へと転化し、さらに私的制裁（債務者を監禁したり奴隷にしたりすること）も認められなくなり、債務者を収容するための公的な監禁場を設置するに至ったという。ただ、中世においては、なお債務者が契約によって自ら過酷な制裁を受けることを約することは自由でありかつ有効であったとされている（以上、勝本・前掲『文芸と法律』304頁参照、さらに小室・前掲『法律家のみたシェイクスピア』121頁～122頁も参照。ちなみに、12表法に関しては、例えば、佐藤篤士『改訂 LEX XII TABULARUM：12表法原文・邦訳および解説』（早稲田大学比較法研究所叢書21・1993年）第Ⅲ表の個所（48頁～63頁）を参照）。

そうすると、やはり、この劇の債務不履行があったときには体の肉1ポンドを切り取るという契約自体は（民事上の契約としては）当時において有効であり、加えて、契約は遵守されなければならないと観念されていた、ということ的前提を考えていくことができるであろう。なお、当時において有効といっても、それは、正確にいえば、すでに触れたようにヴェニスの商人の法廷劇におけるヴェニスの法律として有効ということにほかならない（その説得のために当時の法観念による裏付けが欲しいのである）——そのような法の発見がポーシャの判決の善し悪しを判断しうる一つの手掛かりになるものと思われる。同じような視点に立って、「結局適用が可能となる規範は、二つしかない。すなわち、ヴェニスの法か自然法かであるが、このうち自然法はヴェニスという土地にあっては、規定上排除されていたので、結局はヴェニスの法律だけが有効な規範となる。ただ、適用される現実のヴェニスの法ではなく、戯曲の中でわれわれに示されたヴ

エニスの法律なのである。シャイロックの契約の中に含まれているような、たとえば手や足や鼻、そして頭さえも没収することを含む罰則付きの契約は、中世イタリア、ドイツ、スカンジナビアにおいて見出され、ときにいくつかの判例の中にもこのような契約が有効とされていたものもある。このように考えてみると、シャイロックの契約は、契約として締結することは可能であり、当時の法に従っても有効となる」という傾聴すべき指摘がある（小室・前掲『法律家のみたシェイクスピア』121頁参照）。

- (イ) つぎに、身体の内 1 ポンドを切り取っていいという契約を結ぶに際して、切れば血が出ることや分量に多少の誤差が出ることなど、当事者は当然に承知していたはずである。シャイロックとしても血を流さずに肉を切り取るなどという約束をするはずがないだろう。したがって、契約の内容につき当事者間において不一致もなく、また実際に争った様子もない（契約を締結してもその契約内容がはっきりせず、後で契約当事者の主張が食い違ってくる可能性があるが、その場合には、契約の意味を明確にしなければならない——すなわち、契約の解釈が必要になる）。この点につき勝本先生はいわれる。「本件の場合、契約の解釈に就いては疑ひないのである。肉を切れば血が出ることは初めから当事者が互いに承知してゐることであつて、裁判上当事者間に争ひなき事実である。シャイロックが刀をとって詰め寄つた際にアントニオが茫然として為すべき術なく突立つてゐる様子でも明白である。文句があればアントニオが先づ述べべきである、契約の成立に関与しない裁判官が、血を流さずに切れとは契約の曲解である。この言を聞いてシャイロックは裁判官の非常識に驚いたらうが、アントニオは更に意外に思つたであらう。」（勝本・前掲『文芸と法律』265頁）。

たしかに、このような判決が罷り通るならば、「豚肉きっちり100グラム下さい」と注文された肉屋さんは困る。そういう注文の仕方には正確に応じることができないからである。加えて、血を含んでも骨を含んでもダメ、わずかの誤差もダメ、というのでは商売ができない。今日、電車・バスに乗るのにいちいち自分の体のみならずバッグや靴・帽子・傘、

冬にはコートも含むといった特約を結ばなければならないというのは非現実的である。

なお、この点につき、平野晋「シェークスピアと“法と文学”の研究」は、「『血を一滴も流すな』云々という契約文言通りの『字句解釈』がおかしい、という多くの批判に対する評者の反論」という見出を付けて次のように述べる（以下の「法と文学」の研究および教育用サイトを参照（中野好夫訳に拠っているようである）。すなわち、ポーシャによる血を一滴も流してはいけない云々という解釈は、契約の文言のみに解釈を拘泥させていて、契約の真の意味や黙示的な合意事項を解さないのにおかしい、という批判は法律家による『ヴェニスの商人』批評の中に多く見かけます。しかし、実はポーシャは、血を一滴も云々という命令を下す前に、賢くも、シャイロック自身に契約の「文言通り」の解釈を求める点を強調させ、その同じロジックで血を一滴云々というように切り返す構造を、戯曲の中で採っています。……自業自得・因果応報という構造を上手く仕込んであるのです。すなわち、正に、肉一ポンドを切ろうとするその直前に、以下のようやりとりしています。ポーシャ「ではシャイロック、その方の費用で外科医を呼んでおけ。／出血死に至るといけないから、傷口の手当てをするためだ。」シャイロック「はて、証文に書いてございましたか？」ポーシャ「書いてはいない、しかし、よいではないか。／そのくらいの慈悲は、かけてやってもよからうが。」シャイロック「そんな話はございません、証文にございません。」（この文献は、http://www.fps.chuo-u.ac.jp/~cyberian/William_Shakespear.html にて参照されたい。）

この大野氏の見解は、上述した福田・前掲『ヴェニスの商人』169頁の中村保男氏（解説）のいう「彼はみずから設けた冷酷の罠にみずからはまりこむ滑稽な鼻つまみ者」とほぼ同様の視点に立つものといえよう。

- (ウ) こうしてみると、ヴェニスの法廷におけるポーシャの契約の解釈が——当時における法の一般的確実性（法的安定）という観点からいっても——適切であるとはとても思われなない。「三百代言的な詭弁」と批判されると

ころである。他方、具体的妥当性のある結論を導くために、昔から事実を曲げるとか見て見ぬふりをするといった手法が——法の適用が厳しく行われ勝手に法を解釈することが困難であった時代においては——しばしば行われてきたところである。江戸時代の大岡越前守のお裁きやローマ時代の *monstrum* の法理などはよく知られている（末弘厳太郎『嘘の効用 上』川島武宜編（1988年・富山房百科文庫）31頁～32頁参照——同『役人学三則』佐高信〔編〕（2000年・岩波現代文庫）67頁以下（「嘘の効用」）にも収録されている）。ヴェニスの法廷において、もし、ポーシャが何か巧妙な擬制（フィクション）を取り得ることができたならば、また違った裁判が展開された可能性もあろうが、そのあたりは各々の想像に任せることにしたい。

- (エ) そこで、当時の法律および法観念に沿った上で（法廷劇における法律に基づき契約の有効性を前提とした上で）、アントーニオーの命が救われるような——そういう意味で中間説といえる——巧い判決はないものだろうか。ポーシャ（裁判官）はシャイロックに向かって、当時のヴェニスの法律を読み聴かせていていたことを再度掲げてみよう。

「ヴェニス市民に非ざる者にして、市民の生命に危害を加えんともくろみしこと明白になりたる場合は、その企図の直接なると間接なるとを問わず、危害を加えられんとしたる側において、相手の財産の一半を取得し、他の一半は国庫の臨時収入として没収する。かつ罪人の生死は公爵の裁量に委ねらるべきものとし、何人もこれに容喙することを得ず……（本を閉じる）現在のお前の立場がこれに該当する」と（前述）。

なお、「……市民の生命に危害を加えんともくろみし……」の個所につき、勝本・前掲『文芸と法律』206頁は、以下のような原文を引用している。

Portia….

It is enacted in laws of Venice,

It is be prov'd against an alien

That by direct or indirect attempts

He seek the life of any citizen,

……以下略……

【付言すると、今日の多くのテキストによれば、上記2行目の部分につき、“If it be proved against an alien”と表記されている。例えば、以下のサイトを閲覧されたい—— <http://www.william-shakespeare.info/act4-script-text-mercant-of-venice.htm>】。

要するに、ヴェニス市民でない者が（外国人）、ヴェニス市民の生命に危害を加えようとしたことが明白になったときは（中野訳：「ヴェニス市民に対し、生命を脅かした犯罪事実が明白になった節は」）、その者の生死は——公爵の裁量に委ねるものとされるから——財産どころか自分の命が危うかったのである（法律がそれを認めていたのであった）。加えて、上述のように（2『ヴェニスの商人』の背景）、「ゲッターほど豊かな施設が整った場所は、ヴェネツィアの他の地区には見当たらない」といわれるほどユダヤ人は豊かであったのであるが、それももとをたどれば、1516年のヴェニス共和国の法令がユダヤ人の居住を認めたからである。そういうヴェニス市民の生命にユダヤ人が危害を加えようなどというもくろみなどもってのほかである……ヴェニス市民にはそんな憤りが充満していたに違いない。

法廷に登場したシャイロックに、公爵が「……お前はただ残忍な敵役を演じて見せているだけなのではないか、そうしておいて、いよいよ幕が降りようという瞬間、急に思いもかけぬ慈悲と憐憫を示すのではないか、同様、思いもかけぬ今の残忍な芝居と打って変ってな。なるほど、今は是が非でも罰金の支払を要求している。それもこの商人の肉1ポンドという。が、おそらくそんなかたは免除してやる気なのであろう。いや、そればかりではない、人間と愛に動かされ、元金の一部も許してやろうと言うのであろう。つまり、この男の損失を同情の目をもって見てやるということだ。それも、このところは重ね重ねの打撃、いかに貿易王と言われる身でも動

きがとれまい。誰しも惻隱の情をかきたてられよう。……一同、かねがねお前のやさしい答えを心待ちにしているのだ」というと、シャイロックは、「……わけをいえとおっしゃる、なぜ腐れ肉1ポンドが欲しさに3千ダカットを取らぬのか、……家に鼠が出て困るとなれば、たとえ1万ダカットかかってもいいから、そいつに一服もってもらいたい、そう私が申しましたら？　いかなもので、これをお答えと認めていただけますかな？」という。また、「氣にくわぬ、だから殺してしまう、それでも人間か？」というバサーニオーに対して、「憎い、だから殺したくなる、人間なら誰しもそうだろうが？」とシャイロックは切り返す（このあたりの部分は上で引用しなかった）。さらに（上で引用したように）、シャイロックは、「さよう、その胸だ、証文にそうある、……『心臓すれすれに』はっきりそう書いてある」といっているが、「心臓すれすれ」の辺りの肉1ポンドを切り取る行為は、まさに致命的というほかないのであり——想像すらしたくないのだが、450グラムの肉というのは、例えば、ステーキ用牛肉450グラムを考えると分かるようにかなりの量であり、それも「心臓すれすれに」ということになると、その結末がどうなるかは明らかである——これでアントニオーの命が失われぬなどということは到底考えられないことである。このようなシャイロックの「法廷」での一連の発言からして、もはやシャイロックが「市民の生命に危害を加えんともくろみしこと」は明白といわざるを得ない。

以上のことを総合的に考慮すれば、裁判官は、以下のような判決を下すべきだったのではないだろうか。

「肉は切ってもよいが、生命を害してはならぬ。」これは、中間説に立つ勝本正晃先生の説である（勝本・前掲『文芸と法律』267頁）。実に巧い判決だと思う。また、イエーリングがいう「正義の女神が剣をとる力と、秤を操る技とのバランス」も十分取れているように思われるのである。そこで、私も勝本説に賛成しつつ、敢えてここは私なりに（勝本説とほとんど違わないが——邦訳の僅かなニュアンス違いに過ぎないが）、ポーシャ

が読み上げたヴェニスの法律（“He seek the life of any citizen”）にできるだけ沿った形で次のような判決を出そうと思う。

「肉 1 ポンドを切り取るがよい。だが、生命に危害を加えることは罷り成らぬ。」（福田訳に従ってみたが、中野訳に従えば、「肉 1 ポンドを切り取るがよい。だが、生命を脅かすことは罷り成らぬ。」ということになるうか）。

このような判決ならば、一般般的確実性・法的安定という要請を満たしつつ、さらに、胸から 1 ポンド（約453.6グラム）の肉を切り取る行為（生命を奪う行為）そのものがヴェニスの法律によって阻止されることとなり、結果的にヴェニスの市民感情に適った判決（具体的妥当性）が導かれるものと思われる。シャイロックのその後の身の振り方は、「公爵の慈悲」に頼むほかないだろう。

おわりに

少しは理屈と人情の調和のとれた判決に近づいたような気がするが、ただ、そのような判決では、観客の立場として「してやったり」と胸を撫で下ろす気持ちにはどうしてもなれない。それどころか、演劇としてはまったく面白味に欠ける。そこはやっぱり、「切り取ってもいいが、一滴の血も流してはならぬ」という、まさに「愚にもつかぬ問答」によって、「みずから設けた冷酷の罠にみずからはまりこんだ滑稽な鼻つまみ者」に「それでよろしゅうございます」（“I am content.”）と渋々いわせなくてはならない。何といても、「法を楯にとる冷酷無常」と「時には法をさえ曲げる慈悲」との対決において——シャイロックにはまことに気の毒ではあるが——「後者の勝利」に爽快感を覚える一瞬は大事であろう。そういう意味では（劇の中では）、あれはあれで名判決に違いない。まさに（「大岡裁き」ならぬ）「ダニエル裁き」といえる（ちなみに、シャイロックやグラシャーノーの口から、名裁判官としてダニエルの名前が出てくるが、旧約外典「ダニエル書補遺」によれば、スザンナという美しい人妻が不倫をしたと嘘の告訴をした長老二

人を巧みな裁判で救ったのがダニエルなのだそうである)。

わが名奉行大岡越前守(大岡忠相:1677年~1751年)ならば、この訴訟をどう裁くだろう。きっと、法律における擬制(フィクション)を駆使しながら、ポーシャとは異なる「大岡裁き」をしてくれるものと思う。

蛇足ではあるが、先ほどの「それでよろしゅうございます」(“I am content.”)という台詞をどういうふうにいわせるかが演出上の一つのポイントらしい。「本当に満足してそう言うのか、それとも、腹の中では不満で一杯でありながら、しぶしぶ『いやだが、しかたがない』というふうに低くこもった声で言うのか。この芝居を純然たる喜劇と見る立場に立てば、すべてをハッピー・エンドに導く前者をとるのが正しいのだろうが、私の聞いた英国のレコードでは、後者の言わせかたをしていた。この解釈に従えば、シャイロックは、ここで最後に舞台から消える瞬間まで、満足することを知らない我利我利亡者でありつづけることになる。」(福田・前掲『ヴェニスの商人』168頁の中村保男氏の解説を参照)。

それにしても、「我利我利亡者」で、「法を楯にとる冷酷無常」な、法の「不備を狙った悪辣な金利業者」(中野・前掲『ヴェニスの商人』208頁の解説参照)として描かれたシャイロックが、アントーニオの生命に危害を加えようとしたことが明白になったときはヴェニス法律によってどのような制裁が加えられることになるか、知らないはずがないだろう——百も承知だったに違いない。ユダヤ人がヴェニスで生活していくために越えてはならない一線がそこにある——逆にいえば、そのことを守っていれば少なくともヴェニスで生活し金儲けすることはできる——からである(そんなことも知らない間抜けな金貸業者であって、そもそもこの劇が成り立たない)。そういう筋書きで進んでいくと、「肉1ポンドを切り取るがよい」という判決を求めているシャイロックは、それが認められた暁には、ノーブレス・オブリージュ(noblesse oblige)ではないけれども、ヴェニスにおける富めるユダヤ人としていかに振る舞うべきかを心に決めていたのではないかというストーリーも成り立つだろう。例えば、自分の生命さえ危うくなることを覚悟し、

法廷で堂々とアントーニオーの命を奪って本懐を遂げたいと考えていたのかも知れない（公爵が「シャイロック、お前たちとの心の違いを見せてやろう。命は助けてやる、頼まれずともな。……。」という、シャイロックは「いや、命でも何でも取るがいい、お情けは要りませぬ。……。」と応じているあたりから窺えなくもない）——ただ、これでは悲劇で終わってしまう。あるいは、また、アントーニオーの命を奪いたいのだと残忍さを演じておきながら、いよいよクライマックスに達したとき、一転してかすり傷にもならない程度に留め、それから先は、法廷に登場したシャイロックに向かって公爵がいつていたように、慈悲と憐憫を示しながらヴェニス市民の惻隱の情をかき立たせようと考えていたのかも知れない（こうした評判が商売に反映していくであろうことは十分考えられることである）——まさに、ハッピー・エンドのストーリーとなるが、ただ問題は、これで観客が集まるかどうかである。少なくともシェイクスピアのお膝元では閑古鳥が鳴くだろう。あれやこれやと空想は広がる。

シャイロックがアントーニオーに対して「深い悲しみと強い嫌悪の情」や「憎しみ」を抱くようになったのは、それまでアントーニオーに犬呼ばわりされ、足蹴にされ、唾を吐きかけられてきたからであった。憎まれ役に描かれたシャイロックにむしろ同情を寄せたくもなる。そういう見方も少なくないが、それも人情というものだろう。シャイロックのそんな心の内を米国の名優アル・パチーノは、映画『ヴェニスの商人』（2004年：マイケル・ラドフォード監督）の中で見事に演じている——私にはそのように観える。

後世の法学者・法律家たちの論争劇を観て天国のシェイクスピアは、「しめしめ、シナリオ通りだな……」などと呟いているかも知れない——もしそうだとすれば、この喜劇の真の幕はまだ下りていないということになるのだろうか。

『ヴェニスの商人』覚書（信州大学法学論集第 20 号・2012 年 7 月）正誤表

・ 80 頁 11 行目

【誤】「ここではどうしても官費で」 ⇒ 【正】「ここはどうしても官費で」

・ 101 頁最後の行

【誤】「ニュアンス違い」 ⇒ 【正】「ニュアンスの違い」

・ 102 頁 7 行目

【誤】「一般般的確実性」 ⇒ 【正】「一般的確実性」

・ 103 頁 1 行目

【誤】「巧みな裁判で救ったのが」 ⇒ 【正】「巧みに裁きスザンナを救ったのが」